魔法使いアルル⑥

羽織かのん・作
kaworu・絵



アルファポリスきずな文庫

もくじ

プロローグ……6

第一章　魔法協会を封印せよ……9

第二章　光の魔法使い集結……60

第三章　最終決戦……101

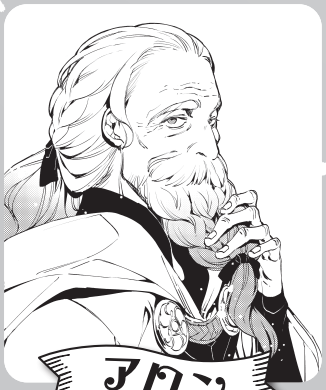
最終章　みんな大好き……227

エピローグ……251

あとがき……254

Contents

登場人物 Character



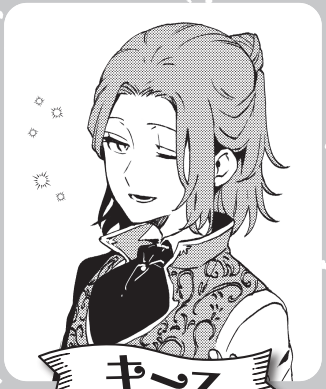
アロン

アルルの優しい育てのお父さん。ホープ王国の偉大なる魔法使いで、みんなの憧れの存在。



ルビー

お屋敷の執事見習いで、アルルとレオの親友。夢を操る能力を持つ。



キース

魔術師の王国の王子。可愛い子にはすぐに声をかける。アルルがお気に入り!?



ノア

黒い魔法使い。災の魔法が得意。アルルとレオを黒い魔法使いの王にしようと企む。



レオ

ホープ王国の第二王子。アルルの親友。黒い魔法使いにさらわれて、闇の王座に囚われてしまい……!?

アルル

心優しい女の子。実は黒い杖に選ばれた魔法使い。黒い魔法使いにさらわれてしまったレオを助け出そうとするけれど……!?

プロローグ

私の名前はアルル。
偉大なる大魔法使いアロンお父さんの弟子であり、黒い杖の使い手。
私はとある屋敷で元々は使用人として働いていたのだけれど、魔法の才能をお父さんに見出されて、魔法使いになったんだ。
魔法使いになってからは冒険の連続だった。
人狼の里では、雪山の中をほうきで飛びまわり、不思議な森では闇の中を通り抜け精霊を助けた。
魔法学園では普通の生徒として通って潜入捜査をしたり、魔術師の王国では王子のキースと仲良くなって悪魔の謎に迫ったり。
本当にいろいろなことがあったんだ。
そして、そんな冒険に出る時にはいつも友達のレオがいた。
レオはホープ王国の第二王子であり、一番の友達だ。

同じ黒い杖の使い手で、アロンお父さんの弟子。そして大量の魔力を有している。
一番最近の冒険の場所は氷の王国。そこでは黒い魔法使いのレレナとその妹のマリアさんを救うことができた。
どの冒険にも、いつも影を落としてくるのは黒い魔法使いの存在だ。
彼らは自分たちの王様を求めている。そして、世界を闇で覆いつくそうとしている。
けれど、そんな黒い魔法使いと私たちはいつも戦って、そして勝ってきた。
たくさんの人を救い、協力し、乗り越えてきた。
お母さんのようなウサギの顔をした執事のサリーと執事見習いのルビーは家族同然で、一緒に暮らしている。
友達もたくさんできた。
本当に毎日が楽しくて、毎日が幸せだった。
レオを、黒い魔法使いたちに奪われるまでは……
私たちはどんな時も手を繋いで、乗り越えてきた。
これからもずっと一緒だと思っていたのに、黒い魔法使いたちはレオの優しさに付け込み、そして連れ去った。

レオに手が届かなかったあの日のことを、私はずっと忘れないと思う。
それなのに……もう、私の隣にレオはいない。
そして……私の世界は一変した。
ううん、私の世界だけじゃない、私たちの住む世界そのものが姿を変えた。
美しい花々を見つめることも、風の心地よさを感じることも、庭でお茶会をすることもできなくなってしまった。
今、私たちの国は黒い魔法使いたちによる闇の攻撃にあい、危機に直面していた。

第一章　魔法協会を封印せよ

――ウーウーウーウーウー。

警報音がけたたましく鳴り響く。
レオがさらわれしばらくして、世界には闇が広がり、街を呑み込もうとする異常事態が起きている。
すでに、黒い魔法使いの手によって小国がいくつか闇に落ちた。
耳の奥まで響くみたいな大きな警報音が、心臓をバクバクとさせる。
怖い。
私たちはホープ王国全土に、祝福の魔法、守護の魔法、防御壁の魔法をかけて、外からの侵入を防ぐ。
杖を振り、走り、魔法が解けてしまっているところはないか確かめる。
空を見上げても、さっきまで広がっていたはずの青空は、暗闇に呑まれてしまって全く

見えない。
「お父さん！　西の地区は完了したよ！」
「了解じゃ！　一度、王城本部へ戻るぞ！」
「はい！」
現在、私たちが闇と対抗するために集まっているのは、ホープ王国の王城本部。
ほうきで王城本部へと移動をすると、そこには、たくさんの怪我をした魔法使いたちがいた。
治療に当たっているのは、私の友達であり、魔法石の民であるルルとハルだ。
「アルル！　大丈夫？」
私も頬に擦り傷ができていたので、それをルルが魔法で治してくれた。
「うん。大丈夫」
ハルもやってきて、二人は私を抱きしめた。
「無理はしないでくれ。いいね」



「アルル。絶対に約束よ」
私は二人のことをぎゅっと抱きしめ返しながらうなずいた。
そして私が向かうのは情報収集室。
ここはどこで何があったのか、偵察に出ている魔法使いからの情報が集まるところで、たくさんの魔法使いと、ウサギのお耳のルビーがいた。
「ルビー」
「アルル！」
ルビーは夢を渡る力を使い、ほかの国と連絡を取りあっている。とても重要な仕事で、ルビーのおかげで、ほかの国がどうなっているのか知ることができた。
ホープ王国と同じように、それぞれの国が闇に呑み込まれないように踏ん張っていた。
私たちはぎゅっと抱きしめあいながら言葉を交わす。
「大丈夫？」
「うん。大丈夫だよ。ルビーはえらいね。仕事頑張ってくれてありがとう」
そう告げると、何度も泣いたであろう真っ赤な目でルビーは言った。
「大丈夫。だって絶対に、絶対に、みんな元の通りになるんだから」

「うん。そうだね」
「ねぇ、アルル。レオについて、何か分かった？」
私は首を横に振る。
レオがどこに連れ去られたのかは調べてみても分からなかった。
「絶対に見つけるから、だからルビー。心配しないで」
「うん。僕、アルルを信じているよ」
「ありがとう」
私はルビーと握手をしてからその場を離れた。
今は、大人も子どもも関係なく、皆ができることを一生懸命している。



一度、お父さんの屋敷に戻ると、私はお風呂に浸かる。
たまに鳴り響く警報の音にびくっと肩を震わせ、お湯の中へと沈んでみる。
お湯の中はなんの音もしなくて静かだ。
――大丈夫、大丈夫。
そう自分に言い聞かせる。
そして気合を入れてお風呂から上がると、洋服を着替えた。
「よし、お父さんのところへ戻ろう」
部屋を出ると、サリーに呼ばれ、私は談話室へと足を向けた。
「サリー。どうしたの？」
「お茶と、にんじんケーキの準備ができていますよ」
テーブルの上には大きなにんじんケーキと、湯気の立つ紅茶が用意されていた。
「え？　あの、サリー。今は食べている時間がないよ」
私がそう言った時だった。談話室に次々に人が入ってくる。
お父さんに、ルビーにハルにルル。
どうしてみんながここにいるの？

不思議に思っていると、みんなは席に座り、サリーがケーキを切り分けてそれを皿に盛っていく。

「ねぇ、みんな。こんなことしている暇ないよ。今も危険な状態で！」

のんびりとお茶をしている場合じゃない。

「アルル、おいで」

お父さんに優しくそう促されるけれど、私は首を横に振る。

「お父さん……でも」

「大丈夫だからの、さぁ」

もう一度促されて、私はお父さんの膝の上に乗った。

「アルル。いいか。焦りは禁物じゃ。それに休める時には休まねばならん」

「でも」

「何故ならば、わしらは皆、アルルが心配だからじゃ」

お父さんはそっと杖を振り、私の前に鏡を出した。

鏡に映る私は、青白い顔をして、目を吊り上げて、怖い顔をしていた。

「あ……」

自分じゃないみたいだった。

いつから私はこんな顔をしていたのだろう。

「私……私、怖くて。レオが、レオが苦しんでいたらどうしよう」

泣かないと決めたから、涙は流さない。

そんな私に、お父さんが静かに話す。

「アルル、いいかの。レオを助けるためには、休息も大事なのじゃよ」

「お父さん」

ここにいる誰か一人でも倒れたら、レオのことを助けられなくなるかもしれない。

だから。

私はうなずくと、サリーからにんじんケーキを受け取った。

「いただきます！」

「「「いただきます」」」

にんじんケーキは優しい甘さで美味しくて、ここしばらく私は、食べ物をちゃんと味わっていなかったことに気がついた。

それと同時に、レオとの思い出が胸の中いっぱいにあふれてくる。

涙がこぼれそうになるのを、私は奥歯をぐっとかんで堪えた。
泣いたらだめ。レオにもう一度会える日まで、私は泣かないと決めたから。
ルビーが口を開いた。
「今、連絡が取れているのは、人狼の里、魔術師の王国、魔法学園、氷の王国、ドワーフの王国……フラム王国や海の国とは連絡が取れていない。そのほかの国もね……」
お父さんが、にんじんケーキをぺろりと食べてうなずく。
「連絡が取れている国には、闇への対策が取られておるからの」
ハルが言った。
「海の民も大丈夫だと思う。一度行ったことがあるけれど、あそこは海底。そして王の力が強い」
ルルもうなずいた。
「フラム王国は、炎の王国よ。闇を焼きつくすくらいの力はあるわ」
どの国も、きっとそれぞれ闇と戦っている。
お父さんが口を開いた。
「もうすぐ、応援も来る予定じゃ」

「応援？」
「ああ。きっとアルルは驚くじゃろうな！　ほっほっほ！」
お父さんの明るい顔は、元気と勇気をくれる。
私が笑顔を返した時だった。
「緊急事態発生っぽ！　緊急事態発生っぽ！」
魔法の伝書鳩が突然現れたかと思うと、私たちの頭の上を飛びまわる。
皆に緊張感が走る。
「魔法協会本部が襲撃っぽ！　魔法協会本部が襲撃っぽ！」
私とお父さんは立ち上がった。
「行くぞ。アルル」
「はい！」
私たちは魔法の杖を出すと、ほうきにまたがる。
「「二人共気をつけて！」」
四人に見送られ、私たちは移動を開始した。
転移魔法の隙をついて闇に取り込まれないように、移動はもっぱらほうきだ。

私たちは、王城本部の中をすごい速さで飛んでいく。
魔法使いのみんなが緊張した面持ちで、魔法の杖を胸に当て敬礼する。私たちの武運を願ってくれているのだ。
私とお父さんはそれに応えるように、魔法の杖を胸に当てうなずく。
――魔法を胸に。
闇をはらい、光と共に。
建物の外へと出た私たちは、そのまま空へと向かって飛ぶ。
ホープ王国の周りにはドーム状に結界魔法をかけているけれど、その向こうには、こちらを狙う闇が広がっている。
「アルル。わしは自分の周囲に守護の魔法を張り闇の中へ向かう」
「私はそのままでも大丈夫。私にとって、闇は怖いものじゃないから」
「ほっほっほ。心強いのぉ」
普通の魔法使いは、闇の中を突き進むためには自分の周りに守護の魔法をかけなければいけない。そうでなければ、ものの数分で闇に呑み込まれてしまう。
でも、私は黒い杖に選ばれし魔法使いだから、闇に心を呑み込まれることがないのだ。

「さぁ！　ゆくぞ！」
「はい！」
私たちは闇の中を突き進む。
闇の中は静かだ。
ただその中には闇の精霊たちもいて、クモやムカデの姿でそろりそろりと闇の中をうごめいている。
お父さんの後ろを私は飛んでいく。
闇を突っ切るように空へと出ると、まぶしさに私は一瞬目を瞬かせ、そして息を呑んだ。
闇が、ホープ王国の結界魔法にこびりつくように張り付いている。
それはまるで一つの生き物のようだった。
あまりに恐ろしい光景に体がぶるっと震える。
そんな私とは裏腹に、お父さんがほっとしたように言った。
「よかったわい。世界がすべて闇に閉ざされたわけではなくて」
そうだよね。まだ全部が闇に呑み込まれたわけじゃない。こうして青空があるんだから。
「うん」

「青い空が気持ちいいのぉ。アルル、さてさて、こんなにいい天気じゃ。全容が見えれば対策も立てられる。少しの時間だろうが、闇をはらい、皆に青空を見せてやろう」

「はい！」

私とお父さんは魔法の杖を合わせる。

そして、静かに魔力を集中させると声をそろえて言った。

「闇よ、在るべき場所へ帰れ！」

魔法の杖から光が舞い、闇へと届いた瞬間、闇は光に包まれてじわりじわりと消えていく。

そして、ホープ王国の上空を覆っていた闇ははらわれ、地上に光が届く。

歓声が聞こえた。

きっと、人々が青空を見て歓喜の声をあげたのだと思う。

けれど、これは一時的な対処に過ぎない。いずれまた闇はホープ王国を覆うだろう。

お父さんが、魔法を使って自分の声を街へととどろかせた。

「闇がはらわれたのは一時的なもの。また闇は現れるだろう。だが、決して心の光を閉ざすなかれ！　いずれこの青空を我々は取り戻す」

すると、街の人々の声が聞こえてきた。

「偉大なる大魔法使いアロン殿万歳！」

「希望を！　光を！　信じております」

皆、諦めていない。

私はお父さんと一緒に空を飛んでいく。

大丈夫。きっと、きっと光はあるから。

高い位置から見て分かるのは、闇は地上すべてを覆っているわけではないということ。

街を狙い、人がいる場所を狙い、闇は巨大な塊となって移動している。

「お父さん、見て」

「ああ」

私が指さした先にあるのは、魔法協会本部だ。

私が初めて魔法協会に来たのは、お父さんの娘になってしばらく経った時。

そして、そこでレオと出会った。

大きなお城のような魔法協会は今、黒い闇に覆われていた。

それだけではない。闇の精霊たちがうごめき、魔法協会本部を攻撃していたのだ。

「中へ入り込むぞ！」

「はい！」
迷うことなく闇の中へと飛び込もうとした、その時だった。
「お父さん！　あれ」
「ほっほっほ。リーベルの仕業じゃろ」
闇を寄せ付けない光の魔法が道を作り、私たちに向かって伸びてきたのだ。
私とお父さんはうなずきあうと、その光の道をほうきで通り抜ける。
闇は光を怖がり、光をよけていく。
「アルル！　入り口じゃ！」
「はい！」
私は魔法の杖を構えると唱えた。
「開け！」
扉が勢いよく開き、私たちは中へと滑り込む。と同時に、扉は闇を入り込ませないように即座に閉まった。
部屋の中で歓声が沸き、魔法協会会長であるリーベルさんがやってくる。
「アロン！」

「リーベル」
二人は固く握手を交わしあい、私の周りを魔法使いたちが取り囲む。
魔法使いたちの顔色は良くはない。
お父さんの登場に、涙する人までいた。
「状況は」
お父さんの問いかけに、リーベルさんが答えた。
「……昨晩から、何度か黒い魔法使いの襲撃があった。それを退けてはいるが、このままではここはいずれ陥落するだろう」
「ほっほっほ。リーベル、冗談を言うでない。ここはさまざまな罪人を収監している。そやつらが闇に染まり暴れだしたならば、一気に被害は広がるぞ」
「ああ。だからこそ、決断が迫られているのだ」
お父さんはハッとしたように目を見開き、それから、ゆっくりと息を吐く。
「決断って何？」
私が小声で尋ねると、リーベルさんが教えてくれる。
「魔法協会本部を黒い魔法使いに奪われるわけにはいかない。もしそういう事態になっ

た時には、封印するのじゃ」

――封印魔法。

それは、内側と外側で同時に魔法をかけて、空間に鍵をかけることだ。

鍵をかけられ封印された内側の時は止まり、外側から鍵をかけた者が魔法を解かない限り開くことがない。

黒い魔法使いにここを奪われるよりは封印をした方がいいということなのだろう。

「どうやってするの？」

リーベルさんは覚悟を決めたように言った。

「私が魔法協会に残る。封印は内側と外側で同時にやらねばならぬのだ」

「え!?」

私が驚くと、ほかの魔法使いたちが反対するように声をあげる。

「リーベル様がいなければ、魔法協会の指揮はどうするのです！」

「あなた様はこれからの戦いに必要な存在です」

たしかにその通りだと思った。

魔法使いたちをまとめられるのはリーベルさんしかいない。

けれど、リーベルさんは首を横に振る。

「封印の魔法は、技術と魔力が必要。私に代わってできる者はいるか？　それに、その後、封印が解かれる日まで、耐えねばならん。危険な役目は会長である、私の仕事だ」

魔法使いたちは黙る。

そうだ。

内側で封じられてしまえば、その封印が解けるまでは閉じ込められるということだ。

お父さんはリーベルさんの肩を叩いた。

「リーベル。頼むぞ」

「あぁ。早々にこの争いを終わらせて、私を封印から目覚めさせてくれ。頼むぞ」

「あぁ」

もし、黒い魔法使いに負ければ、リーベルさんを助けられなくなる。

私は胸がぎゅっとした。

怖くて不安で。

けれど、大丈夫。絶対に負けないから。

そう自分に言い聞かせて、私たちは封印の魔法についての打ち合わせをしていった。

封印魔法は外側と内側から同じ魔力量を流し込み、そして同じタイミングで鍵をかけるように魔法を作動させる。

その途中でもし黒い魔法使いに襲撃されれば、私はお父さんとリーベルさんが魔法をかけ終えるまで時間稼ぎをしなければならないのだ。

「……アルル、頼むぞ」

「うん。お父さん」

黒い魔法使いがいつ現れるか分からない。

だからその時が来たら、ほかの魔法使いと協力して、私はやり遂げなければならない。

私は自分の手をじっと見つめた。

これまで、怖くて寂しかった時にはいつもレオがいた。

手を握っていてくれた。

けれど、今はいないのだ。

自分の手をぎゅっと握りしめ、私はゆっくりと深呼吸した。

打ち合わせが終わると、リーベルさんが私とお父さんに告げた。

「封印の前に、見せておきたいものがある。ついてきてくれ」

なんだろう。

私とお父さんはリーベルさんの後ろをついていく。

魔法協会には第一層から第十層まで続くらせん階段があり、層を越えるためには魔法で封じられた扉を通らなければならない。

扉は、層を増すごとに大きく重たくなっていく。

そして、第十層に着くと、その扉は恐ろしいほど大きかった。

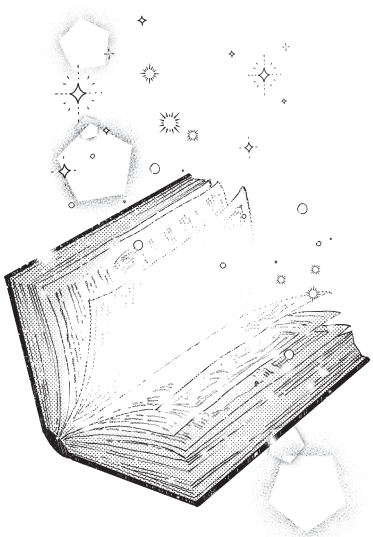
リーベルさんが杖を構えて呪文を唱える。

「我、魔法協会を守りし魔法協会会長、リーベルなり。門を開けよ」

次の瞬間、扉から悪魔のような姿をした巨人が現れる。巨人はリーベルさんをじっと見つめ、扉を開けた。

中へと入ると、ひんやりとしていた。

暗い部屋の中央に、光に照らされた一冊の本があった。



リーベルさんが杖をかざすと、本が輝いてゆっくりと開いていく。
そこに描かれていたのは、漆黒の王座。
ノアが、私かレオに就いてほしいと言っていたものだ。
「これは？」
お父さんの問いかけに、リーベルさんが重い口を開いた。
「遥か昔。私やアロンが生まれるよりもさらに昔に封じられた記録が保管されている。これは魔法協会の汚点であり秘密。かつて、魔法協会には三人の魔法使いがいた。名前を、ノア、ジャル、ジンという」
「え？」
「なんじゃと？」
「黒い魔法使いの五人衆の三人だ。あやつらは、かつて魔法協会で働き、そして漆黒の王座を生み出した研究者だ」
私とアロンお父さんは目を見開いた。
「待って。あの三人が？　魔法協会の魔法使いだったの？」
「そうだ。記録によれば、ごく普通の魔法使いだったそうだ……。だが、闇を研究する過

程で生まれた漆黒の王座の力によって……黒い魔法使いに落ちたのだ。魔法協会は協会から黒い魔法使いを生み出してしまったことを恥じ、汚点として記録を封印していた。私は漆黒の王座について調べる過程で、このことに気づいたのだ」
お父さんの眉間にシワが寄り、そして少し考えてつぶやいた。
「ずっと、疑問じゃった。何故、アルルやレオが狙われ続けるのか。黒い魔法使いの言う漆黒の王座とは、どのようなものなのだ。何故、レオを選んだ？　自分たちが座ればいいではないか」
本のページがめくられる。そこには漆黒の王座の記録が書かれていた。
【漆黒の王座に座れるのは、〝黒き杖に選ばれた者〟のみ。王座に座った者は、黒い魔法使いの王となり、闇を従える】
闇を従える……
そういえば、と私は思い出す。
黒い魔法使いの一人、毒呼のドリーにさらわれた時、黒い魔法使いたちの住む城に広がる闇を見た。普通の闇ではなかった。
じゃあ、あれはなんだったの？

千年に一度生まれる光と闇。私は、西の森で見たそれを思い出した。
私のお母さんが、悪い魔女ダリアを倒すために一度つかまえていた強大な闇だ。
「お父さん。闇って、千年に一度生まれる、あの西の森で見た闇のことじゃないかと思うの」
「あぁ。わしも、それを考えていた」
あれは本来、人が従えることなど不可能な、強力な存在だと思う。けれど漆黒の王座にそれを可能にする力があるとしたら？
ぞっとする。
「漆黒の王座は、自らに座る王を見つけるために、ノア、ジャル、ジンの三人を黒い魔法使いに落としたのだろう。そして三人は、王を見つけるために黒い魔法使いをさらに増やしたのだ」
リーベルさんの言葉に、お父さんはうなずいた。
「であれば、漆黒の王座をどうにか壊さなければな」
「うん」
その時だった。警報音が鳴り響く。
――ウウウウウウウウウウウウ。

魔法の伝書鳩が現れ、私たちの頭の上を飛びまわった。
「魔法協会本部上空！　黒い魔法使いが現れたっぽ！　現れたっぽ！」
私たちはうなずきあうと、急いで階段を上った。
そこでは魔法協会の魔法使いたちが騒がしくしている。
「会長！　見てください！」
「黒い、魔法使いです」
外の光景が魔法で映し出されていた。
「レオ!?」
そこには、空中に浮かぶ漆黒の王座に座るレオと、黒い魔法使いの五人衆がいた。
「お、お父さん！　レオが！　レオが！」
「アルル、落ち着くのじゃ」
「お父さん、レオを助けに行こう！」
私はそう告げたけれど、お父さんは首を横に振った。
「今は無理じゃ。いいか。アルル。今すべきことは、ここを確実に守ること」
「でも……レオは」

私は拳をぎゅっと握りしめた。
レオを助けたい。けれど……
お父さんが私の肩に手を置く。
「レオは絶対に助ける。確実に助けるために、ここを守らねば。ここを奪われたら、黒い魔法使いはさらに力を増すだろう」
レオを取り戻すため――
私はうなずく。
「分かった」
お父さんは杖をぐっと握って、リーベルさんに言った。
「地下にいる囚人を外に出すようなことになれば、事態は悪化する。リーベル、やるぞ」
「あぁ。分かった」
「アルル、よいか。もし、黒い魔法使いたちが守護魔法を破って中へ入ってきそうになったら、できるだけ時間稼ぎを頼む」
「はい！」
魔法協会の中央にらせん状の地下への入り口がある。封印するのは、地下の第一層から

ら第十層までだ。
リーベルさんが第一層へと下りて、こちらを見上げた。
お父さんとうなずきあうと、魔法の杖を合わせ、そして同時に封印の魔法が始まった。
「我アロン、ここを封じし者」
「我リーベル、ここを封じし者」
「鍵となりて、封じの魔法をここに」
「鍵となりて、封じの魔法をここに」
「「かける者なり！」」
魔力のうずが二人の間に生まれ、混ぜ込むように光が広がっていく。
まるで絵具を混ぜたような光景だった。
お父さんとリーベルさんの息はピタリと合っている。
熟練のその技に、周りにいた魔法使いたちが驚きの声をあげていた。
「さすがは、偉大なる大魔法使いアロン様だ」
「リーベル様もすごい！」
そんな中、魔法で映し出された映像の中でノアが動くのを見た。

「……来る」
私はその場にいる魔法使いたちへ声をかけた。
「私は時間稼ぎに外へ出ます！　もし黒い魔法使いが中へ入ってきたら、皆さんはアロンお父さんとリーベルさんを守ることを中心に行動を！」
「「「「はい！」」」」
魔法のほうきを出すと私はそれにまがたり、飛ぶ。
そして魔法協会を出ると、暗闇を突き抜けて、レオがいる場所へと向かった。
「おやおや……姫君。いらっしゃったのですね」
魔法協会の入り口である桟橋の前に、黒い魔法使いの五人衆とレオがいた。
私は五人の前に降り立つ。
劫火のノア、幻影のオロチ、毒呼のドリー、蟲使いジャル、鬼武者のジン。
それぞれ強い魔力を持つ黒い魔法使いだ。
私はレオを見た。
レオは眠るように王座に座っていて、ピクリとも動かない。
今すぐにでも、レオを取り戻したい。

でも、私が今するべきことは、お父さんとリーベルさんの魔法が上手くいくように時間を稼ぐこと。
だからできるだけ会話を引き延ばさなきゃ。
「レオは無事なの？」
そう尋ねると、ドリーがレオの頭を優しくなでる。
「お元気ですよ。まだ眠っていらっしゃいますが」
オロチがにやりと笑った。
「次に目覚める時は……すべてを忘れ、我らが王となっているはずです」
「すべてを……忘れ？　それは、どういうこと？　なんですべてを忘れるの!?」
声を荒らげてそう尋ねると、ジャルとジンが答えた。
「くひひ。姫君、レオナルド殿下は我らが王となるのです。記憶など不必要」
「がはは！　その通り！　我らが王は世界をすべて闇にするのだからな！」
ノアは微笑みを浮かべる。
「姫君にはちゃんとご説明してあげましょうか。我らは殿下を王座に座らせ闇に染まっていただきました。その後、オロチの調合した薬を飲ませました。記憶を消すために。何故

かって？　だって記憶があったら、姫君たちと戦うのを拒むかもしれないでしょう!?」
その口元は抑えきれない高揚感を示すような、三日月のような微笑みへと変わった。
「あぁ！　楽しみです！　殿下が目覚め、世界を闇で閉ざすのが」
私は首を横に振る。
「すべてを闇になんてさせない。私や白い魔法使いたちが、この世界を守ってみせる。レオだって、レオだって取り戻すもの！」
そう告げると、ノアが周囲の様子を見て尋ねた。
「ふむ……姫君、お一人ですか？」
「ええ。そうよ」
お父さんがいないことを不思議がっている。
私は小さく深呼吸をして自分を落ち着かせると口を開いた。
「ねぇ、ノア。ノアは、どうして漆黒の王座に王を座らせたいの？」
できるだけ話を引き延ばすために、私は先ほどリーベルさんから聞いた件について、ノアに聞くことにした。
「どうして？　王を求めるのは当たり前でしょう？」

私はちらりとドリーとオロチを見た。
「ドリーもオロチも、人からひどいことをされて、闇へ落ちた。それは知っている。でも、三人は？　ノア、ジャル、ジン。あなたたち三人はどうして？」
一瞬、三人が動きを止めた。
「私は、魔法協会の地下で漆黒の王座の秘密を知ったわ。あなたたちは、魔法協会で漆黒の王座について研究をしていたのでしょう!?」
すると、ノアが笑みを消した。
「なんの、ことです？」
覚えていないの？
ジンが面倒くさそうにつぶやく。
「あぁ。もうごちゃごちゃと。今関係ないだろう！」
「いいえ。関係あるわ。だって、あなたたちは漆黒の王座に操られているだけかもしれないもの！」
そう告げた瞬間のことだった。
漆黒の王座から大量の黒い闇が噴き出し、私に襲いかかってきた。

私はそれをかわすと魔法の杖を振る。
「消し飛べ！」
闇を消すと、私は言った。
「三人に、思い出してほしくないのかしら。ねぇ、ノア、ジャル、ジン。どうだった？」
ジャルが頭を押さえ、そして、うめき声をあげた。
「なななななななうううううう」
そんなジャルに、ジンが首をかしげる。
「操られてなんていねぇだろ？　何動揺してんだ！」
「あああぁぁぁぁ。ううううう」
「どうしたんだ。ジャル？」
ジンが心配そうに見ると、ジャルが顔を上げた。
「……だ、ず……け……て」
私は目を丸くした。
今、ジャルは「助けて」と言った？
けれどジャルはすぐに頭を振り、いつもの笑顔に戻る。

「くひひ。すみません。なんだか、ちょっと変な感じがして。でも大丈夫ですよ」
助けてと言ったのは、本心なのではないか。私はそう思った。
すると、ノアが口を開いた。
「……あぁ、これは時間稼ぎですか」
図星をつかれた私は、それを表に出さないようにしながら尋ねた。
「ノア、話題をそらすの？」
「ふむ……そうですねぇ。時間稼ぎということは、何かをしている……何を？」
ノアは視線を鋭くすると、魔法の杖を構えた。
「まぁ、いいでしょう。すべて闇に沈めれば問題ない」
次の瞬間、漆黒の王座から闇が噴き出し、ノアたちを包み込む。
「素晴らしい力だ」
「くひひ。闇が無限に使えるというのは気持ちがいい」
「がはは！　さすがは我らが王よ！」
「ふふふん。そうねぇ。本当に心地のいい闇だわ」
「さぁ、アルル様。我らを止められるでしょうか」

嬉しそうに笑みを浮かべた五人が私を取り囲み、次々に攻撃を仕掛けてくる。
私は、距離を取るように飛びのく。
五人は強力な黒い魔法使いだ。しかもそれぞれ使う技も違う。
アロンお父さんとリーベルさんはまだだろうか。
一人でここを守るのは厳しい。
私は深呼吸をする。
――弱気になるな。
私は覚悟を決めると、飛びまわりながら呪文を唱えた。
「吹き飛べ！」
私が狙うのは漆黒の王座だ。
それにノアは気がついたのだろう。私の攻撃を魔法で弾くと、私と王座とを見比べる。
「……姫君。まさか王座を狙って？」
「えぇ。そうよ」
「我が君に当たってしまったらどうするのですか」
私は笑顔で答えた。

「レオに当てるわけがないわ」
その時だった。レオの瞼がわずかに動き、私は声をあげた。
「レオ!?」
目を覚ましたのだろうか。
すると、レオの瞼がゆっくりと開いた。
ただ……その瞳の色は、私の知っているものではなかった。
仄暗い色に染まった瞳が、私を捉える。
「誰だ」
いつものレオの明るい声ではなかった。
五人衆はレオの前に並ぶと、跪いた。
「「「我が君」」」
レオはじっと五人を見ると、漆黒の王座の上で足を組み替えた。
記憶は、どうなっているのだろう。
今、レオは……
「魔法協会本部か……久しいな」



久しい？　それなら、やっぱり記憶は残っているの？
私は希望を抱いた。
けれど、その希望は一瞬で打ち砕かれる。
「かつて、漆黒の王座はここで生まれた。さぁ、黒い魔法使いたちよ、世界を闇に沈めるぞ」
「「「「かしこまりました」」」」
どういうこと？
混乱していると、ノアが笑顔で言った。
「我が君の魂と漆黒の王座とが繋がったのです。故に、王座の記憶、これからすべき王としての役目が、我が君に受け継がれたのです！　やっと！　やっと我らが王が生まれた！　やっと悲願が果たされた！」
悲願……それは本当にノアの悲願なのだろうか。
私は声をあげた。
「レオ！　私！　アルルだよ！　ねぇ、レオ……私のこと、覚えてないの？」
レオは、私のことをちらりと見た。けれど、すぐに興味なさそうに視線をそらす。
「知らぬ」

「レオ……レオ！」
「うるさい。爆ぜよ」
「え」
魔法の杖を向けられ、次の瞬間、火花が散る。
私はギリギリのところで、防御壁の魔法でそれを防ぐ。
けれど……レオが私に魔法の杖を向けたというのが、心がつぶれてしまうのではないかと思うほど、辛かった。
本当に私のことを覚えていないんだ。
なら、絶対に思い出してもらう！
「記憶よ！　よみがえれ！」
呪文を唱えるが、レオに届く前にノアに弾かれてしまった。
「さて、姫君。ここまで時間稼ぎされましたが、我が君が目覚めた以上、もう足止めはされませんよ」
次の瞬間、ドリーが毒の翼を広げて飛びまわる。すると、まるで雨のように毒が降り注ぎ、魔法協会の防御壁の魔法と守護魔法とが解け始める。

私はそれを止めようと杖を構えるが、私の前にジャルとジンが立つ。
お父さんとリーベルさんの魔法は上手くいっているのかな。まだ時間がかかる？
……いつまで、ここで足止めができるだろう。
私は、覚悟を決める。
私がなんとかしなくちゃいけないんだ。
一分でも長く。
これまで、何度も黒い魔法使いと戦ったことはあった。けれどその時はみんながいた。
今は一人だ。
一人でも、戦わなければいけないんだ。
ノアが杖を構え、それを振る。
「劫火の炎で焼きつくせ」
「氷よ、炎を凍らせよ！」
ノアの炎と私の氷とがぶつかりあう中、高くジャンプしたジンが体に重くなる魔法をかけて落下してきた。
ほうきで飛びそれをよけると、私を追いかけるようにジャルの魔法の虫が飛んでくる。

ニッと笑みを浮かべながら私は杖を振った。
「さぁ、おいで！　蛙よ！　虫を食べつくせ！」
巨大な蛙が宙に現れると、長い舌でジャルの虫を次々に食べていく。
「アルル様ったら、気持ちの悪いものを出さないで」
私の横にピタリと並んで飛ぶドリーに私は笑顔で告げた。
「とっても可愛いのに！　ねぇドリー。私、きっとあなたを暗闇から引き揚げてみせるわ」
「アルル様……」
「毒よ、癒やしの水で打ち消えよ！」
「きゃっ！」
ドリーの毒が私の魔法によって消えていき、ドリーは翼をなくして、魔法で慌ててほうきを出した。
――シュロロロロロロロ。
耳元で聞こえた蛇の動く音に視線を向けると、そこにはオロチの蛇がいて私の首に絡みつく。
私は深呼吸をすると、自分の杖を私自身に向けて唱えた。

「幻の魔法から目覚めよ」
世界がぐるりとまわったような感覚と同時に、私の首に絡みついていた蛇は消えた。
「ふひひひひひ。アルル様、よく私の幻の魔法が分かりましたねぇ」
私は五人衆と向かいあう。
「これまでの間、私は何もしなかったわけじゃない。レオを取り戻すために、あなたたちの魔法の対策は考えていたわ」
私が告げると、ノアが眉間にシワを寄せた。
「さすがは、アルル様」
「本当に！　あはは。アルル様はすごいわ。一つの魔法にどれほどの魔力を使っているの？」
「並大抵の魔法使いじゃ、こうはいかないねぇ……」
「がははは！　本当だな！」
「……幻影の魔法に、すぐに対処するのも素晴らしかった」
五人の言葉に、私は小さく息を整える。
すると、レオが椅子からトンと立ち上がる。
「楽しそうだな。だが、今回の目的は魔法協会地下に収監されている悪人たちだ。彼ら

を解放し、世界をさらに混沌に落とす」
「「「「ハッ！」」」」
「アルルとか言ったな。……邪魔だな」
気がついたら、レオが目の前にいた。そして私の首元に魔法の杖を当てる。
「闇よ……呑み込め」
次の瞬間、私の周りに闇が広がる。
私は突然の暗闇に驚いたけれど、笑みを浮かべると、レオの魔法の杖を持つ手をつかんだ。
「なっ」
「ふふふ。レオ。私に闇は効かないよ」
「なんだと」
「どんなに暗い闇だろうと、私には効かない。世界がたとえ闇で覆いつくされたとしても！
私は希望を捨てずに光を放つ！」
「光を？　暗闇の中で？」
「うん。ねぇレオ。昔、二人で闇から抜け出すために笑いあったね。黒い闇は石鹸では落ちないって、レオは大きな声で笑った」

「石鹸？　そりゃあ……落ちないだろ」
「ふふふ。でも……レオは笑って、闇は消えた。ねぇレオ。笑って。レオが笑ってくれたら、レオの闇もどこかへ行っちゃうから」
「……アルル」
今、私の名前を呼んだ？
レオが額に手を当ててうめき声をあげた。
今、一瞬だけレオが元に戻った気がした。
「レオ、レオ！」
必死にレオの名前を呼ぶけれど、レオはうめいてうつむいてしまう。
「う……うぅ」
「「「「我が君！」」」」
五人がレオの元へ駆けつけた時だった。
レオはそれを振り払うと、私をにらみつけて、魔法の杖を大きく振った。
次の瞬間、大量の闇が魔法協会めがけて突き進んでいく。
私は慌てて追いかけ、闇を止めようと魔法を放つ。

けれど、止まらない。
だめだ！　これじゃあ魔法協会の扉を破られて、闇が入り込んでしまう！
そうすれば、中にいる魔法使いたちや、お父さんやリーベルさんも――！
私は杖を構える。
「止まれぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
魔法を放つけれど、闇は止まらない。
私は魔法協会内部まで闇をほうきで追いかけていく。
魔法協会の内側を守っていた魔法使いたちが杖を構えて闇に対抗しようとしていた。
けれど、闇は一気に広がる。
闇に対抗できるのは、闇魔法の使い手か光魔法の使い手のみ。普通の魔法使いでは、闇に心を染め上げられてしまう。
私は魔法使いたちの体や心を守るために魔法を放った。
「闇より器と魂を守り！　動く力を与えよ！」
すんでのところで私の魔法が、魔法使いたち一人一人を守る盾となる。
ぎりぎりのところで、魔法使いたちを守れてよかった。

立ち読みサンプル
はここまで

お父さんとリーベルさんが声をあげた。
「あと少しじゃぁぁぁあ！」
「どうか！　どうか持ちこたえてくれ！」
しかし、そこにノアが突如現れた。
そして楽しそうに笑みを浮かべながら杖を振る。
「業火に焼かれろ」
リーベルさんの体が炎に呑み込まれる。
「うわぁぁぁぁぁっ」
「リーベルさん！」
「くくくくくく！　ここを我らに取られる前に封印しようとしていたのですか。残念でしたねぇ！」
ほかの黒い魔法使いたちは来ていない。
おそらくレオを守るために残してきたのだろう。
お父さんがノアに向かって魔法を放つ。それをノアはひょいとよけた。
「残念でしたねぇ！　あと少しだったのに！　さぁさぁさぁ！　守りきれますかね！」